ハスの観照の歴史的変遷について

渡 辺 達 三*

The Historical Transition of the Appreciation of Lotuses

Satomi WATANABE

摘要: わが国前近代のハスの観照の歴史的な変遷をみ、1) 上代では、ハスへの観照がみられるが、中国からの影響の大きい、女性、恋愛などの寓意性をもった人事中心のものであること、2) 中古では、ハスの植物や生態などの特性がよく観察され、それを基礎にした植物や、釈教、人事上の事柄について観照されていること、3) 中世では現実的、実践的な性格を強め、ハスは環境との連係を強め、空間、時間、音響などの再構成された、複合的な事象の中で、それらとの連関において観照されていること、4) 近世では、前代の現実的指向、環境との連係の傾向をいっそう強め、その植物や生態等の特性に即したものとなり、釈教的な観照はほとんどみられなくなっていること等をみた。

1. はじめに

近年、ハスの展示法などについての相談を受けることが多くなっているが、その折、ハスの“仏花イメージ”が話題となることが少なくない。実際には、ハスの花は、明るく華やかで、その青い葉は生き生きとして、涼しげで、通常イメージされる仏教臭さとはほど違い存在のようにみえる。比類なく美しく、清らかな花と評価されたからこそ、“極楽の花”となったのであろうが、花のもつイメージという問題について改めて考えさせられる。

斎藤は、10世紀頃から、「『はちす』といえは、もっぱら、阿弥陀如来(もしくは発菩提心)の寓喩のみに限られることとなった」「ハチスといえはもはや仏教的シンボル以外にはあり得ないと決めてかかるに至った、それ以後の日本人の“自然観”にはいささかの発展性も力動性もない」と指摘する¹⁾。しかし実際には、ハスは、仏教的観点から自由に、ハスの植物それ自体、ないしはその生態等の特性が美的に観照されることも少なくなかった。和歌集の部立に「釈教」があっても、ハスは必ずしも、そこに置かれるとは限らなかった。そして、ハスの普及をみた江戸時代では、釈教的な観照はほとんどみられなくなっていた。

本報では、以上の観点から、文献に現れたハスの観照の実態を概観しながら、前近代におけるハス観照の歴史的な変遷をみようとするものである。なお、本研究に当たって、(財)日本生命財団の研究助成を受けた。

2. 上代におけるハスの観照

日本にハスが古来から在来していたことは、千葉県検見川の推定2000~3000年前といわれる大賀ハスの発掘事蹟などからみても明らかであろう。

文献上では、肥前の土歯の池のハスが、「此の池の東の海辺に岸あり…。荷(はちす)芰多に生ふ、秋七月、八月に荷の根甚甘し、季秋九月には香と味と、共に変りて用ゐるべからず」²⁾と食用に、常陸の沼尾池のハスが、「古老曰へらく神世に天より流れ来し、水沼なり生ふる所の蓮根、味気いと異に、うまきこと他の所に絶れたり。病める者は、この沼のハスを食へば、早くいえて験あり」³⁾と食用、薬用に供されていた。また、『日本書紀』⁴⁾の皇極天皇三年六月の条に剣ノ池(樺原市石川)に、「一茎ニ二ツノ萼」のある双頭蓮の咲いたことが記されている。舒明七年七月の条にも同様の「瑞蓮」の記述がみえる。

観照関係では、『続日本紀』に「蓮葉の宴」⁵⁾、『類聚国史』に「翫蓮葉宴飲樂賜祿」「蓮葉の宴は観蓮の宴なり」⁶⁾の記述がみられる。「蓮葉の宴」は、中国文化の影響を受けた「観蓮節」であった⁷⁾。なお、推古朝の頃から、精霊棚にハスの葉を敷き、供物をそなえ、祖先を祭る「盂蘭盆会」が行われるようになるが、「蓮葉の宴」もそれに吸収されていったようである⁷⁾。

文学上では、『古事記』、『万葉集』に出てくる。

『古事記』には、「雄略天皇が美和河(泊瀬の下流、三輪山近辺)遊行の折、赤猪子という少女をみそめ、結婚を約束する。しかし、約束は果たされず、少女は80歳となってしまう。彼女は天皇を訪ねるが、結婚の不可能なことを知らされ、つぎの歌を詠んだ」⁸⁾という話が載っている。

日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人 羨しきろかも
「日下の入江のハスは今を盛りと美しく咲いていますが、羨ましいことです」というもので、「花蓮」「蓮」は妙齢の女性を意味するものとみられる。

この「蓮」のもつ含意は、ハスへの美的観照の事実のあったことを示すものである。また、天皇遊行の地とも、

*東京大学農学部附属緑地植物実験所

赤猪子の住所とも関係なさそうな、河内にあったとされる「日下の入江」についてとくに説明がないところを見ると、その地ないし、そのハスは周知のものであり、そこがハスの名所であった可能性もある。

『万葉集』⁹⁾には、つぎの4首が載っている。

み佩かしを 剣の池の 蓮葉に 溜まれる水の 行くへな
み 我がする時に 逢ふべしと 逢ひたる君を な寝ね
そと 母聞こせども 我が心 清隅の池の 池の底 我
は忘れじ 直に逢ふまでに (巻13 3289)
荷葉を詠む歌

蓮葉は かくこそあるもの 意吉麻呂が
家なるものは うもの葉にあらし (巻16 3826)
新田部親王に献る歌一首 未だ詳らかならず
勝間田の 池は我知る 蓮なし

然言ふ君が 髭なきごとし (巻16 3835)
右、或る人聞きて曰く、新田部親王、堵裏に出遊す。勝間田の池を御見はし、御心の中に感緒づ。その池より還りて、怜愛に忍びず、ここに婦人に語りて曰く、今日遊び行き、勝間田の池を見る。水影濤々に蓮花灼々なり、おもしろきこと腸を断ち、得て言ふ可からずといふ。すなはち婦人、この戯歌を作り、専すなわち吟詠す、といふ。

ひさかたの雨も降らぬか蓮葉に
溜れる水の玉に似たる見む (巻16 3837)

3289の歌では「剣の池のハスの葉の上に溜っている水のどちらへも流れていけないように、私が途方にくれているとき…」、3837では「ハスの葉の上の水の玉のように見えるのを…」と、ハスの葉の上の水に関心がもたれている。周知のように、ハスの葉には毛茸といわれる毛状の突起があり、そのため水をよくはじき、水滴をつくるが、その現象が少なくとも3837では観察されている。

3826、3835の歌では、「蓮」は、女性や恋愛の比喻などの意味をもつ。前者では、眼前のハスの葉をわが家の「うも」(芋)の葉とは比べようもないと誉めている。「うも」=いも(妹)の連想をみると、「目の前のハスのような麗人に比べれば、わが家の山妻などは、とてもとて…」ということになる。後者では、勝間田の池を訪れ、ハスの花の光り輝く様に感動し、蓮に恋をかけ、婦人に迫った新田部親王が、「ハスをほめて、私に気があるようなことをおっしゃいますが、本気でないことぐらひは判っています。ちょうど、貴方さまにお髭がないように」と逆襲された戯歌である。3837も、男ばかりの酒宴の席で、ハスのような美女の同席を願って詠んだものとも解釈できるという¹⁰⁾。中国で、「蓮」lian は、音声上、「怜」「憐」「恋」と同じで、詩文上、それらの相關語として用いられることも少なくない¹¹⁾。万葉の歌人たちもそれに倣ったのであろう。さきにみた、『古事記』の場合も同様であろう。

こうして、わが国上代では、ハスの土着的な観照のあった可能性もあるが、文献上に登場する観照は中国の詩文の影響をつよく受けたものであったとみられる。なお、ハスは、日本に在来していたが、中国的な観照法とともに移入されたもののあった可能性も否定できない。

3. 中古におけるハスの観照

中古では、中国の詩文などの影響を受けながらも、日本的なハスの観照が展開される。

平安時代初期の漢詩ではハスそのものが観照されている。『凌雲集』¹²⁾から、嵯峨天皇の「夏日皇太弟南池」、「秋日皇太弟南池亭賦天字」をみると、つぎのようである。

夏日皇太弟南池 御製 嵯峨
納涼儲式南池裏 尽洗煩襟碧水湾 岸影見知楊柳処
潭香聞得芰荷間 風來前浦收煙遠 鳥散後林欲暮閑
天下共言貞万国 何勞羽翼訪商山

秋日皇太弟南池亭賦天字 五言 同
玄圃秋云肅 池亭望爽天 遠聲驚旅鴈 寒引聽林蟬
岸柳惟初□ 潭荷葉欲穿 蕭然幽興興 院裏滿茶煙
「夏日…」では、夏の太陽の落ちかかった頃、池の水の香りがハスの間にたちのぼる様が、「秋日…」では、秋になり枯れかかって葉の破れたハス(破蓮)が観照されている。この「破蓮」の観照は、以後の「敗荷」「衰荷」観照の嚆矢をなす。「破蓮」は、同じく『凌雲集』¹³⁾で、皇太弟により「池際凝荷殘葉折」、「靈沼秋蓮過半黃 露泛穿杯拙生玉…」と、『文華秀麗集』¹²⁾で、「荷潭寒葉水陰穿」(仲雄王)、「菊潭帶露余花冷 荷浦含霜旧蓋殘」(姫大伴氏)と観照されている。なお、平安時代半ば過ぎに成立した『本朝文粹』¹³⁾で、「春は梅を孟陬(正月)に遊び、秋は藕を夷則に折る(手折る)… 源順」と、ハスは夏から秋にかけての代表的な花として評価されている。ところで、10世紀後半から厭離穢土・欣求浄土の思潮が蔓延し、汚濁の人生の対立物である清浄な自然に救いを求める動きがつまり、ハスは人生上の真摯な観照に係る媒体として、また仏典の教える清浄な花、極楽浄土に咲く美しい花として人々の心をとらえていった。

庭園の池などにもハスが植えられ、「水清み 池のはちすの花ざかり 此世のものと みえずもあるかな 紀伊」「紅に ふかくもにほふ はちすかな 池の心や きよくすむらむ 肥後」¹⁴⁾、「おのづから 月宿るべき 隙もなく池に蓮の 花咲きにけり 西行」¹⁵⁾などと観照される。讃岐に赴任した菅原道真は、国分寺門外の池にあったハスを花が咲くようにと植え替えさせ、レンコンを部内28ヶ寺に分け、ハスによる浄土の建設を試みている¹⁶⁾。

また『源氏物語』には、入道の姫宮の仏の供養をする折、「しろがねの花がめに、高くことごとしき、(蓮の)花の色をとゝのへてたてまつ」¹⁷⁻²⁾の記事があり、ハスの花の色の複数あったことが分かる。なお、「はすをは

ちすといふは、ただいふにあらず。はすの実の蜂といふ虫の巢に似たればいふなり」¹⁸⁾とあり、12世紀初頭に、ハスは「はす」とも呼ばれていた。

釈教の代表的な歌として、僧正遍昭の、「はちす葉の濁りに染まぬ 心もて なにかはつゆを 珠とあざむく」¹⁹⁾がよく取り上げられる。「ハスは仏教の象徴の花でありながら、どうしてその葉の露は真珠でもあるかのように人をだますのでしょうか」というもので、『法華経』の「不染世間法 如蓮華在水」²⁰⁾、『白氏文集』の「荷露雖団豈是珠」²¹⁾をふまえたものといわれる。しかし、そこには、ハスの葉の上の露の美しさを実際に体験した感動がある。

ハスの葉の上の露を詠んだ歌には、「夏の日の 水の面かくす 荷ばに ただよふ露の 身をいかにせん よしただ」²²⁾、「夏の日も 心の水を すませとや 池の蓮に 露のすすしき」²³⁾に「ごりにも しまぬ蓮の 身なりせば しづむとも世を 嘆かざらまし 俊成」²⁴⁾、「なをいとへ はすの立葉の 露たにも この世のいけは 風ちらしけり 俊成」²⁵⁾などがあるが、当時の暗い世相の中で、その多くは人生へのつらい観照を伴うものであった。そして、それは宗教的な観照へと展開していくことになる。

ハスは、「よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき、念仏して、往生極楽の縁とすればよ」(『枕草子』63段)²⁶⁾などと、仏教的世界や浄土、極楽などを象徴するものとしての意義を有していた。

『蜻蛉日記』には、母の死後、その身につけていた袈裟をみて、「はちすばの たまとなるらん むすぶにも そでぬれまさる けさのつゆかな 道綱母」²⁶⁾と詠じている場面がある。その「はちすばのたま」とは往生した人のことである。

また、『枕草子』に、結縁の八講を受けている最中に、帰ってほしいとの報せに、ハスの葉の裏に、「もとめても かゝる蓮の 露をゝきて 憂世に又は かへる物かは」と書いてやったとの話が載っているが^{28,29)}、「蓮の露」とは結縁の八講を指す。なお、八講などの行事は、ハスの花の季節が選ばれたようで、『源氏物語』には、「蓮の花のさかりに、御八講せらる」³⁰⁾、「夏ごろ、蓮の花のさかりに、入道の姫宮の御持仏どもあらはし給へる、供養せさせ給ふ」³¹⁾などと出ている。その『源氏物語』にも、「蓮の上」(極楽往生)^{32,33)}、「迎ふるはちす」(蓮の花をもって迎えに来る聖衆)³⁴⁾、「蓮の座」(蓮の花の上。極楽往生したものが浄土で坐る蓮の座)³⁵⁾、「はちすの宿」³⁶⁾などと、釈教上のハスがよく登場する。

なお、「若菜の下」³⁷⁾には、「池は、いと、涼しげにて、蓮の、花咲きわたれるに、葉は、いと青やかにて、露きらきらと、玉のやうに見えわたる。源『あれ見給へ。(蓮は) おのれひとりも、涼しげなるかな』とのたまふ。おきあがりて、(蓮を) 見いだし給へるも、いと、珍しけ

れば、源『かくて見たてまつるこそ、夢の心地すれ。いみじく、『我身さへ限り』とおぼゆる折々のありしはや』と、涙を浮けて、のたまへば、身づから、あはれに思して、紫『消えとまる 程やは経べき たまさかに 蓮の露の かゝる許を』との給ふ。源『契おかむ この世ならでも 蓮葉に 玉るる露の 心へだつな』…」とある。ここでは、病み上がりの紫の上と源氏との会話が、ハスの咲き乱れる池を背景に、その青々とした瑞々しい葉や、葉の上に光り輝く水玉の涼やかさの中に王朝絵巻のように繰り広げられる。最後の源氏の、「契おかむ…」は、死後、ともに極楽往生し同じ蓮華に身を托すること、すなわち、“一蓮托生”を約したものである。

和歌でも、「今日よりは 露の命も 惜しからず 蓮の上の 玉と契れば 実方」³⁸⁾、「はちす葉は 妙なる法の 花なれば まことの池の 心にぞ咲く 顕仲」「うき世には きえなばきえぬ 蓮ばに やどらば露の 身とも成りなん 基俊」³⁹⁾、「二なき 御法のはなは さきにけり はすのたちばの ただ一すぢに 花園左大臣家小大進」⁴⁰⁾、「たのむかな 露のいのちの きゆるとき はちすの上に うつしをくなる 俊成」⁴¹⁾、「波の立つ 心の水を 鎮めつゝ 咲かん蓮を 今は待つ哉 西行」⁴²⁾などと詠まれている。

釈教上のハスは、布教上の意義をもつものも少なくない。『大鏡』には、ある僧の夢に、法華経を写経し終って往生した少将義孝が現れ、「時雨とは はちすの花ぞ 散りまがふ なにふる里に 袖ぬらすらん」⁴³⁾と詠んだとの話が載っている。『梁塵秘抄』には、「経には聞法歓喜讃、聞く人蓮の身とぞなる」⁴⁴⁾などと書かれている。

こうして、ハスは、人生や釈教に関わって観照されるようになるが、「くれなるの 蓮うかべる 緑沼に 白波たてば こきまぜの花 貞文」⁴⁵⁾など、ハスそれ自体を観照するものも少なくない。そして、ハスそれ自体を観照するものももとより、人生や釈教に関わって観照するものであっても、ハスはかなりよく観察され、その特性が把握されている。「かたがたに 匂ひあひたる 蓮かな なべての花の 香にも紛れで 貞行」⁴⁶⁾、「玉水を はすのわか葉に まきこめて こぼすや花の ひかりなるらん」⁴⁷⁾、「いけ水の そこよりいつる はちすはの いかてにこりに しますなりけん 俊成」⁴⁸⁾などと、注意力や、想像力、好奇心も程々にみえる。なお、さきにみた『枕草子』63段の部分は、「花なき比、みどりなる池の水に、紅に咲たるもいとおかし」⁴⁹⁾と続き、ハスの花の絵画的な美しさが表現されるが、144段では、「蓮の浮葉のいとちいさきを、池よりとりあげたる。葵のいとちいさき。なにもなにも、ちいさき物はみなうつくし」⁵⁰⁾と、ハスの葉が池から取り上げられ観照されている。そのような中で、ハスが、「夕立の 晴るれば 月ぞ宿りける 玉ゆり握うる 蓮の浮葉に 西行」⁵¹⁾、「風ふけば 蓮のうき葉に 玉こえて すゞしくなりぬ 蛸の声 源俊頼」⁵²⁾などと詠まれていっ

た。これらの歌で、ハスは、心よりも、むしろ、環境の要素とのつながりの中で観照されている。中世的な観照を先取りするものである。

この時代には、また、ハスに因んだ恋の歌もいくつかみられた。『後撰和歌集』には後宮サロンなどを舞台にした恋の歌が多く載っているが、その中に、「蓮葉のうへはつれなき うらにこそ 物あらかひは つくといふなれ」「はちすのは いにそ人は おもふらん よには恋ちの中におひつつ」³⁵⁾と詠んだ歌がある。また、源有房は、「恋くさの 露の命のはかなさを 蓮の台に 移してがな」³⁶⁾などと詠んでいる。なお、上代にみられた、ハスに女性や恋愛の寓意をもたせるものは、「乙女子が 姿の池の はちす葉は 心よげにも 花咲きにけり 師頼」³⁷⁾1首がみられるだけである。

4. 中世におけるハスの観照

中世では、ハスは、「盆池新荷 代人 出水新荷葉葉浮 盆池雖小藕如舟…」³⁷⁾と、容器で育成されたもののや、「花三つ、葉三つ立つべく候、此の心は過去、現在、未来三世面般の心なり」³⁸⁾と、立花などでも観照されていた。吉田兼好は、「家にありたき木—草は山吹、藤、かきつばた、なでしこ、池にははちす」³⁹⁾と述べている。

宗教的な観照では、積極的・能動的な姿勢が目立つようになり、また、俗化・戯化されるものもみられた。

前者には、「有漏の身は 草はにかゝる つゆなるを やかてはちすに やとらさりけむ 空也上人」⁴⁰⁾、「露の身のきえなん後は 功德池の はちすのうを 家とこそせめ 前大僧正定海」⁴¹⁾、「極楽の はちすのうへに おく露を わが身の玉と おもはましかば 前権僧正成賢」⁴²⁾などの例がみられる。「おほてらの 池のはちすの 花さかりはこふ心に たむけてそみる 慈鎮」⁴³⁾では、見事な花盛りのハスを、自分の仏道志向への盛り上がる心に手向けようとしている。それは、また、ちょうど、「うれしくも 春のさくらの 色をすてて 夏のはちすに そむころ哉 慈鎮」⁴³⁾と、世俗的な華やかなサクラをあきらめ、ハスに馴じみつつあった折でもあった。そして、慈鎮にとって、「はちす」とは、「はちすこそ 野にも山にも さきにけれ ほとけの道は これよりそ行 慈鎮」⁴³⁾と、必ずしも、植物のハスである必要はなかった。別人のものであるが、「浪に入る 海よりにし の ゆうひこそ 蓮の花の すかたなりけれ 為家」⁴⁴⁾と詠んだ歌もある。

後者では、「西八条の 寺のいにしへ 蓮葉に のぼるや 池の あまがへる」「曾我兄弟は 仏にぞなる 蓮葉に かはづの子ども ならびて」「なむあみだ仏と 落つるかの池 蓮葉の 上にのばれば 目の舞ひて」⁴⁴⁾などの例がある。「西八条」で、あまがへるは尼僧でもある。「曾我兄弟」は河津祐泰の長子と次男で、蛙に掛けている。

その他、「はちす葉に あさおく露の みだれあひて ひ

とつになるも のりの心か 小侍従」⁴⁵⁾、「かすしらぬ ちゝのはちすに すむ月を 心の水に うつしてそ見る 鑊也法師」⁴⁶⁾などの詠がある。

人事上の観照では、現実を直視する態度がみられる。「すさまじな 心の水も 蓮葉の にごる江にこそ 花はさきけれ 融覚」⁴⁶⁾、「にごりなき 池のはちすの 花なれば 此世の露は すゑぬなるべし 中努卿のみこのむすめ」⁴⁷⁾「時鳥 巢もりのかひ子 生み捨て うら表ある 世のにごりかな 宗砌」「蓮葉の 陰なる水は 月もなし ほしの走や 飛火なるらん 宗砌」⁴⁸⁾では、現実の矛盾や不都合な状況が詠まれる。そのため、「後の世は 頼み定めぬ 契にて はちすの上の 風の白露 宗祇」⁴⁹⁾ということになる。

その他、「つゆの身を 玉ともなさん はちす葉の にごりにしまぬ わがころより 前権僧正」⁴⁵⁾、「蓮さくあたりの風も かをりあひて 心の水を すます池哉 定家」⁵⁰⁾、「なかむへし 池にはちすの 花さかり にこりにそまぬ わか心より 慈円」⁴⁵⁾、「せめて蓮の 契ともがな 住がたき 春の野寺の 花散て 心敬」⁵¹⁾などと詠まれる。

ハスそれ自体も、「はちす葉に 風もなびかぬ 夏の日も おきさだまらぬ つゆのしらたま 具親」⁴⁵⁾、「五月雨に 池の汀や まさるらん 蓮の浮葉を 越る白波 後鳥羽上皇」⁵²⁾、「池水を はしめて出る 蓮葉を けに紅と 思ひそめなり 為家」⁴⁴⁾などと観照される。

「夏ふかき 入江の荷 咲きにけり 浪にうたひて 過ぐる舟人 後京極摂政」⁵³⁾では、「入江の荷 咲きにけり」と「浪にうたひて 過ぐる舟人」の2つの事象が詠み込まれる。前者では「夏が深まっていることだ」、後者では「過ぐる」と、それぞれに、「時」の経過も表出される。そして、“静”の“入江”“ハス”に“動”の“浪”“舟”が、静寂な“ハス”に“歌”が、さらに、ハスの“紅”に浪の“白”が配される。また、「はちすさく 池の夕風 夏はあれど よし一花の 秋のなでしこ 定家」⁵⁰⁾では、“強く生命感あふれるハス”に、“やや弱々しい可憐なナデシコ”が巧みに配されている。盛夏と秋の“時間”の交差も妙である。これらにおいて、ハスは、空間、時間、音響などの複合的な事象の中で、それらとの関係において観照される。すなわち、ハスとそれに関わる環境の諸要素とが再構成され、そのような構成された事物の関係の中でハスが観照されている。

なお、環境との関わりでは、「風をいたみ 蓮の浮葉に 宿しめて 涼しき玉に 蛙鳴也 後鳥羽院」⁵⁴⁾、「山もとやしげる林の まへの池に 蓮もしろき 鷺ぞむれるる 為尹」「池水にも ふしにふなや みだるらん はすのうき葉の ゆるぎ立ちぬる 為尹」⁵⁵⁾、「すむ鳥も いかかねぶらむ 風わたり 雨うつ池の 荷葉のこゑ 正徹」⁵⁶⁾と、動物の登場も多くなっている。

漢詩では、「敗荷」⁵⁷⁾で、「藕池秋後可憐生、破笠乱零曲柄横。蓮子已供童子摘、空房蜂去旧窠傾」と、秋の淋

しい敗荷が詠まれるが、「蓮子は已に童子の摘むに供し…」と、荒涼たる風景のなかに子供を配し、やさしい人文の香りを漂わせている。「遊魚動荷」³⁷⁾では、「水底遊魚影有無動荷圍共相娛 錦鱗疑是化龍去 香露跳盤頷下珠」と、ハスをざわつかせる遊魚が登場する。

5. 近世におけるハスの観照

ハスの観照は、近世において、空前の賑わいをみせるようになる。江戸時代最初の園芸書『花壇綱目』には、「赤、白、薄色あり、咲比、六、七月」³⁸⁾と、3色のハスが記載されている。元禄時代には、『草花絵前集』に、“とうれん”を含め、5品種が記載される³⁹⁾。文化文政時代、松平定信は、築地に浴恩園を造成し、多数のハスを収集し、『浴恩園蓮譜』を描かせている。それを写したといわれる『蓮花百種』には90種近い品種が記載されている⁴⁰⁾。また、「さゝれてもよきは蓮の花瓶哉 正継」⁴¹⁾、「生花は人にさゝるゝはちす哉」⁴²⁾、「蓮活けて眠れば見ゆる 仏かな 存義」⁴³⁾と、ハスの生花が早くから行われていた。

観照では、宗教的なものはほとんどみられなくなる。そして、ハスは、「うつくしき所すくなし、たとえば上手の絵における天人の顔にひとし、どこやら仏めきて心こそおかるれ」⁴⁴⁾と、その抹香くさがさ指摘されるようになる。俳句にも「抹香くさし 花の中にも 蓮独」⁴⁵⁾、「蓮の花 仏くさいが 一つ難 荊口」⁴⁶⁾などと詠まれるが、それも江戸時代の前半の時代までである。

ハスは、「蓮よ蓮 大かた人の すかぬ花 東海」⁴⁷⁾、「かたちより 心のひねし 蓮哉 荷兮」⁴⁸⁾などの指摘もあるが、依然、聖なるもの、君子の花とみられていた。そして、「君子なれど ぐなりと見ゆる 蓮かな 伊安」⁴⁹⁾、「見る人の 気に裏もなし 蓮の花 呉橋」「鳩は鶴の 罪も知でや 池の蓮 百童」⁵⁰⁾、「人柄も しるき家居や 蓮の花 它谷」⁵¹⁾、「世中よ 針だらけでも 蓮花 一茶」⁵²⁾などと詠まれる。また、「はづかしや 蓮に見られて 居ル心 湖春」⁵³⁾、「白蓮を 切らんとぞおもふ 僧のさま 蕪村」⁵⁴⁾と、ハスに対すると、何かと謙虚になる。それゆえ、「飛べよ蜚 同じ事なら 蓮の上 一茶」⁵⁵⁾ということにもなる。

しかし、「けふもけふも 茶をたをされつ 蓮の花 道彦」⁵⁶⁾と、ハスの花見茶屋で代金が踏み倒されるような状況では、「咲花も 此世の蓮は まがりけり 一茶」「蓮の葉に 片[足]のせて 昼寝哉 一茶」⁵⁷⁾、「蓮の花 少し曲るも うき世かな 一茶」⁵⁸⁾となり、やがて、「蓮の花 大浴[俗]人に 貰ひけり 一茶」「さく蓮 下水下水のおち所 一茶」⁵⁹⁾などと詠まれる。こうなれば、もう、宗教の役目など果たせない。

人生、人事上の観照に関するものでも、かつてのように正面きっての深刻なものは影をひそめ、「蓮の葉に 浮

世の露の こけ歩く 青楮」⁶⁰⁾、「さればこそ 賢者ハ富ず 敗荷 蕪村」⁶¹⁾のように、あくまでもハスの特性や現象などに即したものとなっている。

そして、ハスと密接な関連をもつ現象等が、そのとりまく環境の諸要素等との関わりの中で観照されていく。香りでは、「鼻の穴 さすほど匂ふ 蓮かな」⁶²⁾、「蓮の香も 行水したる 景色哉 芭蕉」⁶³⁾、「蓮の香や 水をはなるゝ茎二寸 蕪村」⁶⁴⁾、「蓮の香の 堤を越る 夕べ哉 斗流」⁶⁵⁾などと詠まれる。芭蕉の句の意味は、「花が見えなくなると、改めてハスの香りの心地よく漂っているのに気づかされる。まるで行水にでもつかっているように消々しく」というものである。蕪村の句では、ハスの香りは茎が二寸になった時が一番いいと言い切る。ハスへの日頃の観察がなければ、こうは詠めない。

「白蓮に 朝日こぼるゝ 匂ひかな 古勇」⁶⁶⁾、「白蓮に 人影さはる 夜明かな 蓼太」⁶⁷⁾では、鏡のように澄んだ白蓮の静謐な様がよく詠まれている。「蓮の実の 供に 飛入 庵かな 等哉」⁶⁸⁾では、ハスの実のように、お互いに、どこへ行くか分からない仲間が、偶然、庵で出くわしたのであろう。庵の前にはハス池があったかもしれない。本句に因んでは、「蓮の実の 飛や元より 無東西 露川」⁶⁹⁾がある。「音なして 人に浴せつ 蓮の露 嘯山」⁷⁰⁾では、はかないものの象徴であった“ハスの露”の別の面が詠まれる。ハスの葉に降る雨の音は大きく、印象的であるが、「花よりも 一雨きかせ 蓮の音 麦林」⁷¹⁾では、日照り続きの中、灼々と咲くハスの花への多少の揶揄と願望が込められる。「枯蓮や めづらしがるや 流行医者 道彦」⁷²⁾では、枯蓮と流行医者の組み合わせが妙。「秋風の 夢にあそぶや 蓮の笠 除風」⁷³⁾では、荒涼たる景に詠まれがちな枯蓮が夢幻の中にとらえられ、面白い。「犬の声 ぱったり止て 蓮の花 一茶」⁷⁴⁾では、ハスの花のもつ威厳や存在感、その静謐な佇まいがよく表出されている。

そして、ハスの生態や特性が、「池に蓮 一度放せば 千重哉 宗隆」⁷⁵⁾、「蓮池の ふかさわするゝ 浮葉かな 荷兮」⁷⁶⁾、「蓮池の かたちは見ゆる 枯葉哉 一髪」⁷⁷⁾、「蓮の花 ちるとはなしに 欠にけり 水音」⁷⁸⁾、「己が葉に 押れてちるや 蓮の花 除風」⁷⁹⁾、「廿日荅 一日蓮の さかりかな 嘯山」⁸⁰⁾、「炎天に 立のぼる蓮の にほひかな 卓池」⁸¹⁾などと観照される。

動物などもよく登場する。「客あるじ 共に蓮の 蠅おはん 良品」⁸²⁾。せっかくの美しいハスの花、ハエは迷惑である。「蓮池に 鷺の子遊ぶ 夕ま暮 杜国」⁸³⁾、「散蓮について廻るや 水すまし 蓼松」⁸⁴⁾、「蓮池や 泥亀に 鷺に 置合せ 麦林」⁸⁵⁾では、動物との和やかな交流がみられる。その他、「そよがさす 蓮雨に魚の 児躍る 素堂」⁸⁶⁾、「蓮葉に なにを持よる 羽蟻哉 松哥」⁸⁷⁾、「蜂の羽の つよりて暑し 蓮の花 毛続」⁸⁸⁾、「蜻蛉の すくはれ顔や 蓮のたう 露川」⁸⁹⁾、「すっぽんも 朝飯得たか

蓮の花 一茶」⁵⁾などがある。

以上のようなハスは、「蓮はまだ 立葉も見へず かきつばた 句空」¹⁰¹⁾、「飛石も 三ツ四ツ蓮の うき葉哉 蕪村」¹⁴⁾とその花の季節が待たれる。「寄逢うて しゆせん 蓮花の はなみ哉」⁶²⁾からは、17世紀半ばに集銭(割勘)で、ハスの花見を行っているのが分かる。「花の数も 四百余あるか しの蓮 政信」⁶²⁾では、すでに、ハスの名所が形成されていたのであろうか。ハスの観賞は概して炎天下、「しほからき もの喰たき 蓮見哉」¹⁰²⁾となる。その他、「拱て もの知り顔の 蓮見かな」⁶³⁾、「異国の 僧もおはして 蓮見哉 嵐甲」¹⁰³⁾、「釣舟に 御僧を乗せて 蓮見哉 維駒」¹⁰⁴⁾、「麻頭巾 蓮見にまかる 小舟かな 春泥」¹⁰⁵⁾、「何いふて 囁く舟ぞ 採蓮哥 春泥」¹⁰⁶⁾、「わけ入や 浮葉乗越 蓮見舟 几童」¹⁰⁶⁾、「夙に起て 蓮見ん為ぞ 夜訪し 白雄」¹⁰⁷⁾、「蓮采や 美人の手にも 水馴棹 嘯山」¹⁰⁸⁾「蓮見にと 朝寝の罪 たたきけり 嘯山」¹⁰⁸⁾、「さむしろの はしに 蓮見の小脇差」¹⁰²⁾などと賑やかに観照される。

6. むすび

以上、文献に現れたハスの観照をみ、つぎの結果を得た。

1) 上代において、ハスの観照がみられるが、それは、多分に、中国の詩文の影響を受けたものとみられ、ハスは女性や恋愛の相関語として用いられることが多かった。

2) 中古では、ハスの植物それ自体、ないしはその生態等の特性がかなりくわしく観察され、その成果が、ハスそれ自体、あるいは人事、釈教上の事柄に関わって詠まれた詩歌などにおいて、一定度、反映されていた。

3) 中世では現実的、実践的な性格を強め、環境とのつながりを深めていく。ハスは空間、時間、音響などの再構成された、複合的な事象の中で、それらとの連関において観照されるようになっていった。

4) 近世では、前代の現実的指向、環境との関係の傾向をいっそう強める。そして、釈教的な観照はほとんどみられなくなり、人事に関する観照でも、ハスの植物やその生態の特性に即したものに限られるようになっていった。

参考および引用文献

1) 斎藤正二(1985):蓮・植物と日本文化 八坂書房、105-117 2) 肥前国風土記 3) 常陸国風土記 4) 舎人親王ら撰:日本書紀 5) 藤原経綱・菅野真道ら撰(797):続日本紀 6) 菅原道真編(892):類聚国史 7)

阪本祐二(1977):観蓮会:蓮法政大学出版局、64-70 8) 太安万侶撰(712):古事記 9) 万葉集 10) 山田宗睦(1989):ハス:花-古事記 八坂書房 438-447 11) 小野岑守ら撰(814):凌雲集 12) 藤原冬嗣ら撰(818):文華秀麗集 13) 藤原明衡編:本朝文粹 14) 藤原公実・大江匡房ら:堀河院御時百首和歌 15) 西行:山家集 16) 菅原道真(900):菅家文章 17) 紫式部:源氏物語 1' 蜻蛉 2' 鈴虫 3' 明石 4' 若菜上 5' 橋姫6' 御法 7' 若菜の下 18) 源俊賴:後醍醐天皇 19) 紀友則・紀貫之・凡河内躬恒ら撰(913-14):古今和歌集 巻3 20) 法華經 從地涌出品 21) 白居易(845):白氏文集 15 放言5首 22) 後鳥羽院(1200):三百六十首歌合 23) 藤原俊成:長秋詠藻 24) 藤原長清:夫木和歌抄 25) 清少納言(995-1004):枕草子 1' 63段 2' 31段 3' 144段 26) 藤原道綱母:蜻蛉日記 27) 花山院撰(1005-6):拾遺和歌集 28) 崇徳院(1150):久安百首 29) 大鏡 30) 後白川天皇撰(1169):梁塵秘抄 31) 右兵衛少尉貞文(906):右兵衛少尉貞文歌合 32) 源広綱(1104):散位広綱朝臣後度番歌合 33) 源俊賴:散木奇歌集 34) 源俊賴:金葉和歌集 35) 大中臣能宣・清原元輔・源順ら撰:後撰和歌集 36) 源有房:有房集 37) 春沢永恩(1574):枯木稿 38) 立花伝書 39) 吉田兼好(1330-31):徒然草 40) 藤原定家撰:新勅撰和歌集 41) 叟若磨・嘉宝磨(1330-5):続門葉 42) 二条為世撰:続千載和歌集 43) 慈円(1346):拾玉集 44) 山崎宗鑑:竹馬狂吟集 45) 後鳥羽院(1202):千五百番歌合 46) 藤原為家撰(1261):弘長百首 47) 藤原為家撰(1271):風葉和歌集 48) 宗叟(1452):花能万賀喜 49) 宗祇:宗祇句集 50) 藤原定家:拾遺愚草 51) 宗祇:竹林抄 52) 後鳥羽院(1236):遠島御百首 53) 後京極撰政:西洞隱士百首御歌 54) 後鳥羽院(1205):後鳥羽院御集 55) 冷泉為尹(1415):為尹百首 56) 正徹:正徹千首 57) 虎関師鍊:濟北集抄 58) 水野元勝(1680):花壇綱目 59) 伊藤伊兵衛(1699):草花絵前集 60) 渡辺達三(1992):松平定信におけるハスの事績:造園雑誌 56(3)、193-208 61) 松江重頼編(1633):犬子集 62) 鶏冠井良徳編(1651):崑山集 63) 存養(1766):古来庵発句集 64) 許六(1706):風俗文選 65) 松意:談林軒端の独活 66) 朱拙:初便 67) 惟然編(1702):二葉集 68) 荷兮編(1693):曠野後集 69) 山岡元隣(1671):宝蔵 70) 蘆元坊(1737):渭江話 71) 嘯山(1773):俳諧新選 72) 一茶(1810-18):七番日記 73) 嵐雪編(1690):其袋 74) 蕪村(1784):句集 75) 一茶(1819-20):八番日記 76) 一茶(1803):享和句帖 77) 一茶(1819):おらが春 78) 一茶(1822-5):文政句帖 79) 蕪村:句稿屏風 80) 荷兮編(1689):阿羅野 81) 一茶(1795):たびしうる 82) 去来・卯七編(1704):渡鳥集 83) 蓼太(1769):蓼太句集 84) 去来・凡兆編(1691):猿蓑 85) 松経編(1724):水の友 86) 嘯山:律亭句集 87) 麦浪:麦林集 88) 道彦:続葛本集 89) 一具編(1848):発句鈔追加 90) 維舟編(1702):時勢粧 91) 荷兮編(1686):春の日 92) 倉羅(1701):追鳥狩 93) 卓池:青々処句集 94) 沾圃ら編(1698):続猿蓑 95) 荷兮編(1685):冬の日 96) 蓼松(1831):八朶園句集 97) 其角編(1682):虚栗 98) 路通(1691):俳諧勧進帳 99) 支考(1699):東華集 100) 朱拙(1706):七翼跡集 101) 路健編(1699):旅袋 102) 蒼虬:蒼虬翁句集 103) 几童編(1773):あけ鳥 104) 維駒編(1783):五車反古 105) 召波(1777):春泥句集 106) 几童(1789):井華集 107) 白雄(1793):白雄句集

Summary : This study is concerned with the history of the appreciation of lotuses in Japan. The result is as follows : 1) During the ancient period, there exists the appreciation of lotuses, which is influenced by the proses and poems of China. 2) During the classical period, lotuses are observed minutely, and its results are reflected in the appreciation of lotuses. 3) During the medieval period, the appreciation of lotuses gains the moments of actuality and practicality. Moreover the lotus becomes the main constituent of the esthetic structure which is composed of lotus and its environmental factors by their being reconstructed. 4) During the pre-modern period, the moments of being in close touch with the character of lotuses and the relationship of the surrounding factors of lotuses are developed maximally.